

## 43 自立訓練（機能訓練）を利用している頸髄損傷者の現状及び課題

自立訓練部 機能訓練課 市川眞由美、輪竹一義、田中 匡、森田奈々、植木朋子  
阿部真市、菅野博也、三好尉史、小田島 明

【背景及び目的】利用者は入所時の段階で、退所後の社会生活に向けたイメージや目標時期をもっていることは少ない傾向にある。そのため、支援者側も初期の期間設定を模索して決定している部分もあり、期間設定および在所日数の妥当性について検討する必要性を感じている。今回の調査では、当部で2009年10月から頸髄損傷者の機能訓練サービスを開始し3年が経過したことから、障害状況及び在所日数とFIMの値の変化についてまとめ、期間設定の参考にすると共に、今後の業務に反映していくことを目的とした。

【対象及び方法】2009年10月から2012年10月まで当部にて訓練を受け修了した脊髄損傷者のうち、医学的理由及び精神疾患により動作習得に影響があった者2名を除外した16名を対象とした。調査は、性別、年齢、在所日数、ASIA機能分類尺度（以下ASIA）、進路、入所時及び退所時のFIMの6項目について実施した。

【結果】平均年齢は、完全麻痺29.7歳、不全麻痺40.6歳であった。ASIAは、完全麻痺10名、不全麻痺6名となり、完全麻痺の若年層（10代後半から30代）が多い結果であった。在所日数を障害・進路別にみると、障害別ではC6完全麻痺526.0日、C7完全麻痺441.0日、不全麻痺440.5日、中心性頸髄損傷337.5日となり、全体平均が454.5日であった（図1）。進路別は、家庭復帰7名（437.0日）、就労移行支援・職業リハ4名（507.8日）、復学・進学3名（376.7日）、その他2名（526.5日）であった（図2）。FIMを初期と終期の平均得点で比較すると（図3）、C6完全麻痺は76.4点から106.0点、C7は77.2点から99.6点、中心性頸髄損傷は75.5点から101.8点、不全麻痺は86.8点から111.5点となり、概ね自立度が改善する傾向がみられた。

【まとめ】今回の調査では、進路によって在所日数に差が生じる傾向がみられた。家庭復帰の場合、機能レベルに応じた全般的な日常生活動作獲得を目標に期間設定する傾向があるが、復学・進学の場合は、入所当初から具体的な目標時期に合わせて期間設定する為に在所日数が短くなったと考えられる。就労移行支援・職リハの在所日数が長期化した要因は、日常生活動作獲得中心に目標設定がなされ、早期から評価日・利用要件に合わせた期間設定が不足していたことが考えられる。本人・家族・支援者間で入所時から退所後の社会生活を見据えた目標を持つことは、具体的なイメージ化に繋がり妥当な期間設定や必要なサービス内容を提示できるといえる。支援者側は利用者の社会生活イメージ及び目標時期の具体化に繋がるよう、早期から社会生活に直結した情報提供および豊富なサービス内容を提示していく必要がある。今後の課題としては、妥当な期間設定に直結できるよう、継続したデータ蓄積に加え、各動作獲得期間の算出および他施設や脊髄損傷の動向調査等との比較検討、期間設定の再考を含めたサービス内容の見直しが挙げられる。

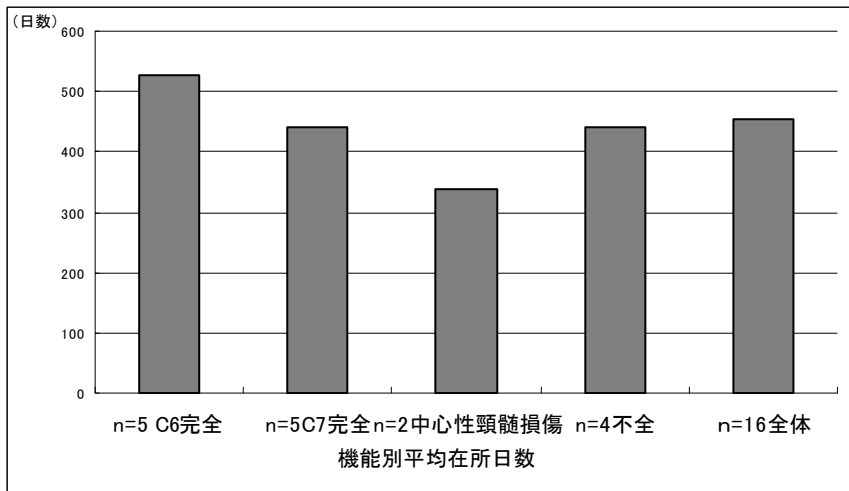


図1 機能別平均在所日数

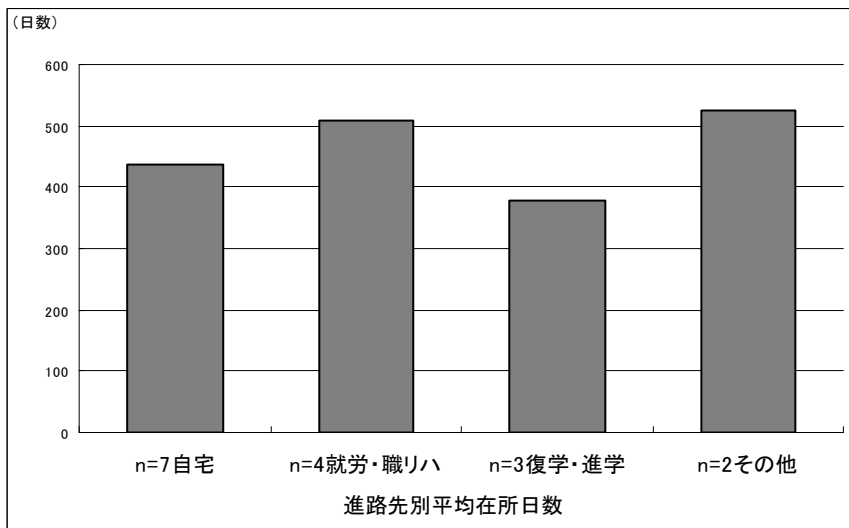


図2 進路別平均在所日数

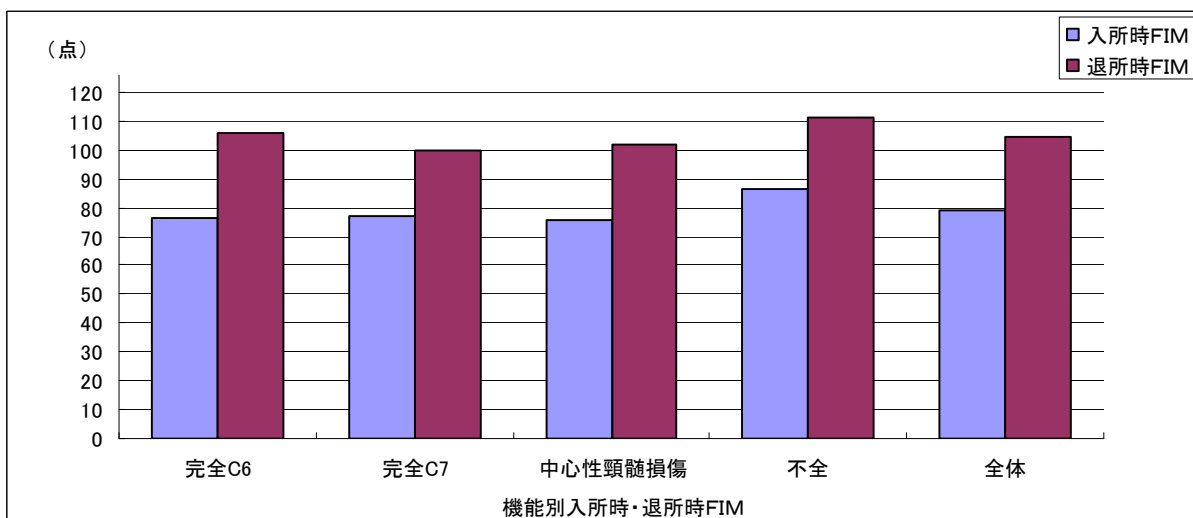


図3 機能別入所時・退所時 FIM